

シャイネスとタイプC行動パターンの関連性

池田真理子・鈴木 平

キーワード：シャイネス, タイプC行動パターン, 特性シャイネス尺度

抄録：シャイネスは自尊心、自己意識、帰属スタイルなど認知的反応に関する概念や、孤独感、恐れ、うつ、神経症傾向、などの情動性に関する概念との関係が示されている。パーソナリティ類型の1つにタイプC行動パターンがある。タイプC行動パターンの感情抑制、理知的・合理的な対処、無力感や抑うつ感、絶望感に陥りやすいことなどの特徴は、対人場面においてシャイネスを生起させやすいと考えられる。そこで本研究では、シャイネスとタイプC行動パターンの関連性を検証することを目的とした。また特性シャイネスの指標である特性シャイネス尺度 (Trait Shyness Scale; 以下TSS; 相川, 1991) の因子構造についても再検討した。都内A大学の学生1170名を対象に、早稲田シャイネス尺度 (Wasada Shyness Scale; 以下WSS; 鈴木他, 1997)、TSS (相川, 1991)、Short Interpersonal Reaction Inventoryの日本語版 (以下SIRI; 熊野他, 2000) を用いた調査を実施した。TSS (相川, 1991) の項目を因子分析した結果、第1因子「積極的行動」と第2因子「社会的自己認識」の2因子が抽出され、十分な信頼性および妥当性が確認された。シャイネスとタイプC行動パターンの関連性については、タイプC行動パターンの社会的同調性を示すタイプ1因子とシャイネスとの関連性が見られた。感情抑制や合理性を示すタイプ5因子との関連性はあまり見られなかったが、シャイネスの改善を考える上では否定的な認知を変容させる重要な要因として捉えることができることが示唆された。したがってタイプC行動パターンは、シャイネスを理解し改善を試みる上で重要な概念であると考えられた。

はじめに

シャイネスとは他者 (特に異性や権威のある人) とのやりとりのある新奇な社会的状況における、主張的な行動を必要としたり評価を受ける場面でより強く喚起されるものである (e.g., Buss, 1984; Russell, Cutrona & Jones, 1986)。シャイネスを理解する方法として関口・長江・伊藤・宮田・根建 (1999) は、シャイネスという現象を認知・感情・行動の3要素モデルから理解することが最も適切であるとしている。シャイネスの徴候は、認知 (自分の行動、他者からの評価などに対する不合理な思考)、感情 (情動的覚醒と身体・生理的徴候)、行動 (社会的スキルの欠如、回避行動など) の3つの側面に現れうる (鈴木・山口・根建, 1997)。シャイネスは状態シャイネスと特性シャイネスととらえられることがあるが、状態シャイネスはある特定の社会的状況の中でのみ生起するものであり、特性シャイネスは特定の状況を越えて比

較的安定して存在する一種の人格特性である（相川，1991）。シャイネスとその他の概念との関連の研究はこれまでに多くなされているが，人格特性としてシャイネスをとらえた場合，シャイネスは非社会的，内向性，非主張性にかなり似た概念であり，さらにシャイネスと自尊心，自己意識，帰属スタイルなど認知的反応に関する概念や，孤独感，恐れ，うつ，神経症傾向，などの情動性に関する概念とはほどほどの関係が示されている（関口ら，1999）。

ところで近年，人が病気であるか健康であるかについて，心と身体の関係が重要な影響を与えると認識されるようになり，性格と健康の問題についての研究がおこなわれてきている（高木・頼藤，2001）。例えば，疾患との関連の研究で有名なパーソナリティの類型の1つにタイプC行動パターンがある。タイプC行動パターンとは，Temoshokが示した概念であるが，タイプC行動パターンの特徴は，怒りや不安などの不快な感情を抑制し，合理的・合理的な対処をする傾向があり，同時に無力感や抑うつ感，絶望感に陥りやすいことなどが挙げられる（*e.g.*, 鈴木，2007）。熊野・織井・山内・瀬戸・上里・坂野・宗像・吉永・佐々木（2000）は Short Interpersonal Reactions Inventory（Grossarth-Meticek & Eysenck,1990）の日本語版を作成しているが，その中のタイプ1（社会的同調性が強い）とタイプ5（社会的望ましさ，合理性，反情緒性，完璧主義傾向が強く，敵意性が低い）の因子がタイプC行動パターンに相当する。心理社会的要因の中では，これらの外的事象との関わり方としてパーソナリティが鍵要因の1つになると考えられているが（永野，2005），タイプC行動パターンは癌に罹患しやすいパーソナリティであるということが，これまでの研究で明らかにされている（Grossarth-Meticek & Eysenck,1988）。タイプC行動パターンの抑制的な行動は本質的には不健康なものではなく，抑制者は控えて他者に不満を漏らさないため社会的に望ましい人として評価されるが，自分が統制できないほどの強いストレスを受けても，より一層，抑制的な行動パターンとろうとするとところに問題がある（中谷・福士，2003）。タイプC行動パターンに見られる感情抑圧をする動機として，合理的・反情緒的な態度に基づき直接的に感情を抑圧する場合と，社会的同調性を重んじる態度が間接的に感情の抑圧をもたらす場合があると考えられる（熊野・織井・鈴木・山内・宗像・吉永・瀬戸・坂野・上里・久保木，1999）。

崔・新井（2000）では，感情表出の抑制とシャイネスの関連について検討した結果，全体的にシャイネスが高い人ほど感情表出の抑制を多く行うことが明らかにされている。このことから，シャイネスの認知・感情的側面は，タイプC行動パターンの社会的同調性や感情抑制などの特徴と関連していると考えられる。社会スキルの構成要因からシャイネスを考えると，シャイな人は他者が表出する反応やコミュニケーションの結果を正確に解釈することができず，他者がシャイな人に対して抱く認知を自己否定的な方向に歪めて推測するため，その否定的な推測が否定的な自己認知の確証へと導いていると想定される（後藤，2001）。タイプC行動パターンには，他者との関わりの中で，感情を抑え，愛想のよい振る舞いをし，決して不平を言わず，自分に身近な人の要求に献身的に答えようとするという特徴がある（Temoshok，1997）。つまり，タイプC行動パターンが強い人は対人場面において自分の感情を抑制し，良好な人間関係を築こうとするが，それがうまくいかなかった場合に抑うつ感や絶望感に陥り，否定的な認知

が生じると考えられる。さらにタイプC行動パターンの強い人は過度に理知的・合理的に対処をしようとするために、そのような否定的な認知が維持され、その結果シャイネスにつながると考えられる。シャイな人とそうでない人の特徴的な違いとして認知をあげている研究者もおり、両者は密接な関係があると考えられる(鈴木・山口・根建, 1997)。岸本(1999)は、シャイネスの問題を考える上で重要なものは、社会的認知と自己認知に関するメタ認知的過程であると述べている。したがって、このようなタイプC行動パターンの対人関係における過剰な適応は、シャイネスの生起要因に関連していると考えられる。そこで本研究では、シャイネス特性とタイプC行動パターンの関連性に注目する。

ところで、シャイネスを測定する尺度の代表的なものに特性シャイネス尺度(Trait Shyness Scale; 以下TSS; 相川, 1991)がある。TSS(相川, 1991)は行動特徴と情動反応の両側面を含む特性シャイネスを測定する尺度として標準化され、5件法16項目から構成されている。通常では1因子構造の尺度として使用されているが、相川(1991)では尺度の標準化の過程で、因子分析を行った結果、2因子が抽出されていた。しかし、この2因子については因子名が命名されておらず、シャイネス特性の中のどの要因を測定しているのかを把握することが難しいという問題点が指摘されるだろう。また因子分析の具体的な手法が明記されていないという問題点もあげられる。したがって尺度の使用にあたり、TSSの因子構造を再度検討する必要があると考えられる。近年の因子分析では、因子間にある程度の相関関係が存在することを前提とした斜交回転を用いるのが主流となっている。本研究でもこの視点に立った分析を行い、TSSの因子構造を再検討した上で、特性シャイネスとタイプC行動パターンとの関連性について明らかにすることを目的とする。

研究1

目的

研究1では、TSS(相川, 1991)の各項目について因子分析を行い、因子構造を検討する。さらに尺度の信頼性、妥当性についても検討する。

方法

対象者と実施期間

都内A大学の学生1170名を対象に調査を実施した。有効回答数は1130名であった。2010年4月上旬～2011年6月上旬に、都内A大学にて調査を実施した。

調査材料

特性シャイネス尺度(Trait Shyness Scale; TSS; 相川, 1991)と早稲田シャイネス尺度(Wasada Shyness Scale; WSS; 鈴木他, 1997)を用いた調査を行った。WSSは認知・感情・行動の3側面から特性シャイネスを測定することができる。5段階で評定する34項目から構成される。行動側面としての「積極性」、感情側面としての「リラックス」、認知側面としての「自信のなさ」、「不合理な思考」の5つの因子が含まれている。鈴木他(1997)によ

て、十分な信頼性と妥当性が確認されている。

分析方法

統計処理ソフト IBM SPSS Statistics19を使用し、TSS（相川，1991）の各項目について最尤法・プロマックス回転を用いて探索的因子分析を行った。欠損値についてはリストごとに除外した上で分析を行った。また、尺度の信頼性を検討するために、抽出された因子ごとに Cronbach の α 係数を算出した。さらに、基準関連妥当性を検討するために、今回新たに抽出された因子とオリジナルの TSS（相川，1991）、WSS（鈴木他，1997）の各因子について Pearson の積率相関係数を算出した。

結果と考察

TSS（相川，1991）の各項目について因子分析を行った結果、解釈可能な2因子が抽出された（表1）。第1因子は「私は新しい友人がすぐできる」や「私は人と広く付き合うのが好きである」など、直接的なコミュニケーション場面における対応についての項目が多く含まれており、「積極的行動」と命名した。第2因子は「私は人がいる所では気おくれしてしまう」や「私は引っ込み思案である」など、集団場面で生じる自己の感情や認知に関する項目が含まれており、「社会的自己認識」と命名した。各因子の寄与率も高いことから、因子の妥当性が十分高いことが確認された。また、Cronbach の α 係数を求めた結果、第1因子は $\alpha = .88$ 、第2因子は $\alpha = .87$ といずれも十分に高い値を示しており、内的整合性の視点から高い信頼性を有していることが確認された。したがって、十分な信頼性が確認された。

以下、本因子分析で得られた尺度を便宜的に TSS2 と呼ぶこととする。また、TSS2 の第1因子（積極的行動）を TSS2-1、第2因子（社会的自己認識）を TSS2-2 とよび、オリジナルの TSS（相川，1991）の第1因子を TSS-1、第2因子を TSS-2 と呼ぶこととする。

TSS2 の基準関連妥当性を検討するために、TSS と WSS との Pearson の積率相関係数を算出した。その結果、TSS2-1（積極的行動）は TSS-1、TSS-2、WSS1（積極性）との強い正の相関があった（ $r=0.74, p<.001$; $r=0.79, p<.001$; $r=0.79, p<.001$ ）。また、WSS2（リラックス）、WSS3（過敏さ）、WSS4（自信のなさ）とは弱い正の相関があった（ $r=0.34, p<.001$; $r=0.26, p<.001$; $r=0.34, p<.001$ ）。WSS5（不合理な信念）とは相関無しであった。

TSS2-2（社会的自己認識）は TSS-1、TSS-2 と強い正の相関があった（ $r=0.85, p<.001, r=0.86, p<.001$ ）。また、WSS1（積極性）、WSS2（リラックス）、WSS3（過敏さ）、WSS4（自信のなさ）とは中程度の正の相関が見られ（ $r=0.49, p<.001$; $r=0.64, p<.001$; $r=0.56, p<.001$; $r=0.52, p<.001$ ）、WSS5（不合理な信念）とは弱い正の相関があった（ $r=0.32, p<.001$ ）。TSS と WSS のほとんどの因子と十分な相関が見られた。したがって、TSS2 の妥当性が確認された。

表1 因子分析の結果

質問項目	第1因子 の因子バ ターン値	第1因子 の因子バ ターン値	共通性	当該項目を 除いた時の α 係数
「積極的行動」 ($\alpha = .88$)				
8 私は誰とでもよく話す。	.89	-.12	.67	.85
1 私は新しい友人がすぐできる。	.84	-.07	.64	.85
11 私は初めての場面でも、すぐにうちとけられる。	.81	-.01	.64	.86
15 私は知らない人とでも平気で話ができる。	.72	-.00	.51	.86
9 私は自分から進んで友達を作ることが少ない。	.69	.02	.49	.87
5 私は人と広くつきあうのが好きである。	.64	-.12	.33	.88
13 私は自分から話し始める方である。	.60	.05	.41	.87
「社会的自己認識」 ($\alpha = .87$)				
12 私は人前に出ると気が動転してしまう。	-.15	.75	.44	.86
3 私はひっこみ思案である。	.18	.70	.68	.85
16 私は人前で話すのは気がひける。	-.02	.69	.47	.86
14 私は人目に立つようなことは好まない。	-.02	.67	.43	.86
2 私は人がいる所では気おくれしてしまう。	.11	.66	.54	.86
4 私は人の集まる所ではいつも、後ろの方に引っ込んでいる。	.19	.65	.61	.85
7 私は内気である。	.20	.65	.63	.85
6 私は他人の前では、気が散って考えがまとまらない。	-.13	.57	.24	.87
10 私は、はにかみやである。	-.18	.49	.16	.88
寄与率 (%) (累積寄与率 = 49.28%)	39.84	9.44		

第1因子と第2因子には、中程度の正の相関があった ($r=0.50, p<.001$)。

注) 逆転項目は、点数を反転させた結果を記載した。

研究 2

目的

特性シャイネスとタイプC行動パターンに関連性について明らかにすることを目的とする。

方法

対象者と実施期間

都内A大学の学生1170名を対象に調査を実施した。有効回答数は1086名であった。2010年4月上旬～2011年6月上旬に、都内A大学にて調査を実施した。調査対象は研究1と同一である。

調査材料

WSS (鈴木他, 1997) と TSS (相川, 1991) と Short Interpersonal Reaction Inventory の日本語版 (SIRI; 熊野他, 2000) を用いた。SIRIは4段階で評定する33項目で構成されており、「社会的同調性の高い」タイプ1, 「不安が強く、ワーカーホリック傾向が高い」タイプ2, 「敵意性が強く、社会的望ましさ、反情緒性、完璧主義、ワーカーホリック傾向が低い」タイプ3, 「神

経症性が低い」タイプ4, 「社会的望ましさ, 合理性, 反情緒性, 完璧主義が強く, 敵意性が低い」タイプ5, 「合理性, 社会的同調性が低い」タイプ6の6つのパーソナリティタイプを識別することができる。本研究では, 痛に罹患しやすいパーソナリティであるタイプC行動パターンに相当する, タイプ1とタイプ5の11項目のみを調査に使用した。SIRIは熊野ら(2000)によって, 十分な信頼性と妥当性が確認されている。

分析方法

統計処理ソフトIBM SPSS Statistics19を使用し, まず各指標の関連を明らかにするために, Pearsonの積率相関係数を求めた。その後, タイプ1の高低またはタイプ5の高低を独立変数, シャイネスの各指標を従属変数としたt検定と, タイプ1, タイプ5を説明変数, シャイネスの各指標を被説明変数とした重回帰分析を行った。また, タイプ1およびタイプ5と, シャイネスに関する各指標について, χ^2 検定を行った。

結果と考察

相関係数

各指標間のPearsonの積率相関係数を算出した。タイプ1とタイプ5は相関無しであった($r=0.15, p<.001$)。タイプ1とTSS-1の間に弱い正の相関があった($r=0.35, p<.001$)。タイプ1とTSS-2の間に弱い正の相関があった($r=0.27, p<.001$)。タイプ1とTSS2-1は相関無しであった($r=0.12, p<.001$)。タイプ1とTSS2-2の間中程度の正の相関があった($r=0.41, p<.001$)。タイプ1とWSS-1は相関無しであった($r=0.13, p<.001$)。タイプ1とWSS-2の間に弱い正の相関があった($r=0.32, p<.001$)。タイプ1とWSS-3の間に弱い正の相関があった($r=0.35, p<.001$)。タイプ1とWSS-4の間に中程度の正の相関があった($r=0.40, p<.001$)。タイプ1とWSS-5の間に弱い正の相関があった($r=0.32, p<.001$)。タイプ5については, いずれの指標においても相関は見られなかった。

相関分析の結果, タイプ1はTSS-1, TSS-2, WSS-2, WSS-3, WSS-4, WSS-5との相関が見られたが, タイプ5はいずれのシャイネスの各指標との相関は見られなかった。したがって, タイプ1はシャイネスと関連があり, タイプ5はシャイネスと関連がないと言える。

表2 タイプC行動パターンとシャイネスに関する各指標間のPearsonの積率相関係数

	TSS-1	TSS-2	TSS2-1	TSS2-2	WSS1	WSS2	WSS3	WSS4	WSS5
タイプ1	.35***	.27***	.12***	.41***	.13***	.32***	.35***	.40***	.33***
タイプ5	-.01	-.04	-.03	.00	-.01	-.13***	.01	-.06*	.03

t検定

シャイネスの各指標について, タイプ1の得点が平均+1SD以上を示した者と, 平均-1SD以下を示した者の得点に差があるかを検証するためにt検定を行った。t検定を行うに当たっては, まず最初にLeveneの検定によって両群の等分散性の検定を行い, 等分散性が統計的に保

証されなかった場合には、Welchの手法を用いて検定を行った。分析の結果、表3に示した通り、すべての指標についてタイプ1上位群の方が下位群よりも有意に高い値を示した。

次にシャイネスの各指標について、タイプ5の平均+1SD以上の者と平均-1SD以下の者の得点に差があるかを検証するためにt検定を行った。分析の手順はタイプ1と同様である。分析の結果、WSS2についてのみ有意差が見られ、タイプ5下位群の方が上位群よりも有意に高かった(表3)。タイプCの高低による、シャイネスの各指標の得点の差をt検定を用いて検討した結果、タイプ1ではすべての指標について有意差が見られたが、タイプ5ではすべての指標について有意差が見られなかった。したがって、相関分析の結果と同様に、タイプ1はシャイネスと関連があり、タイプ5はシャイネスと関連がないと言える。

表3 タイプ1・タイプ5における上位・下位2群間のシャイネスの各指標についてのt検定の結果

	上位群の人数・平均 (SD)	下位群の人数・平均 (SD)	df	t値
TSS-1	n=167・M=20.49 (4.76)	n=183・M=15.33 (4.91)	348	9.97***
TSS-2	n=166・M=32.62 (8.09)	n=183・M=26.57 (7.89)	347	7.07***
TSS2-1	n=165・M=20.60 (5.13)	n=183・M=19.19 (4.90)	345	2.62**
TSS2-2	n=168・M=32.08 (6.77)	n=185・M=22.76 (7.00)	351	12.69***
タイプ1 WSS1	n=171・M=15.29 (4.75)	n=182・M=13.61 (4.81)	351	3.30**
WSS2	n=170・M=17.92 (3.96)	n=183・M=14.49 (4.08)	351	8.41***
WSS3	n=169・M=16.32 (3.18)	n=183・M=12.38 (3.59)	350	9.99***
WSS4	n=171・M=15.92 (3.39)	n=182・M=11.10 (3.67)	351	12.8***
WSS5	n=171・M=15.32 (3.85)	n=182・M=11.84 (3.60)	351	8.77***
TSS-1	n=279・M=17.89 (5.16)	n=117・M=17.97 (5.10)	394	.16
TSS-2	n=284・M=29.18 (7.77)	n=115・M=29.48 (8.34)	397	.34
TSS2-1	n=280・M=19.52 (4.73)	n=116・M=19.72 (5.02)	394	.365
TSS2-2	n=282・M=27.73 (7.71)	n=117・M=27.51 (8.20)	397	.25
タイプ5 WSS1	n=283・M=14.38 (4.50)	n=116・M=14.67 (4.40)	397	.59
WSS2	n=283・M=15.44 (4.01)	n=117・M=16.79 (4.04)	398	3.04**
WSS3	n=282・M=14.28 (4.10)	n=116・M=14.07 (3.38)	218.68	.48
WSS4	n=281・M=13.20 (3.92)	n=115・M=13.74 (3.84)	394	1.26
WSS5	n=284・M=13.74 (3.88)	n=117・M=13.53 (3.63)	399	.49

p<.01 *p<.001

注) 両群が不等分散の場合には、Welchの手法を用いて検定を行った。この場合は、dfは非整数値になっている。(イタリック体部分)

重回帰分析

タイプC行動パターンと特性シャイネスとの関連性についてさらに検討するため、タイプ1とタイプ5の得点を説明変数、シャイネスの各指標を被説明変数とした全投入法による、重回帰分析を行い、結果を表4に示した。分析の結果、すべての分析においてタイプCと特性シャ

イネスの有意な関連性を示した。特性シャイネスに対しては、タイプ5よりもタイプ1の方がより大きな関連性があることが、あらためて明らかになった。

重回帰分析を用いてシャイネスに対するタイプC行動パターンの影響性を検討した結果、タイプ1はシャイネスのすべての指標について影響が認められた。タイプ5はTSS-1, TSS-2, TSS2-2, WSS-2, WSS-4で影響が認められたが、いずれもタイプ1の方が影響が大きかった。したがって、シャイネスへの影響性についても、タイプ1の関連性が高かったと言える。

表4 タイプ1, タイプ5を説明変数, シャイネスの各指標を被説明変数とした重回帰分析の結果

被説明変数	F検定 (df)	R (R ²)	非標準化回帰係数			標準化回帰係数 (β)	
			タイプ1	タイプ5	定数	タイプ1	タイプ5
TSS-1	F (2.1127) =80.01***	.35 (.13)	.44***	-.12*	12.60***	.36	-.06
TSS-2	F (2.1125) =47.13***	.28 (.08)	.55***	-.24**	24.32***	.28	-.08
TSS2-1	F (2.1125) =8.72***	.12 (.02)	.14***	-.09+	18.65***	.12	-.05
TSS2-2	F (2.1128) =115.60***	.41 (.17)	.78***	-.17*	18.00***	.42	-.06
WSS1	F (2.1131) =10.14*	.13 (.02)	.14***	-.05	12.80***	.13	-.03
WSS2	F (2.1131) =86.64***	.37 (.13)	.33***	-.26***	14.46***	.35	-.18
WSS3	F (2.1129) =80.01***	.35 (.12)	.32***	-.06	10.08***	.36	-.04
WSS4	F (2.1130) =122.24***	.42 (.18)	.39***	-.17***	9.55***	.42	-.12
WSS5	F (2.1129) =69.26***	.33 (.11)	.30***	-.03	9.40***	.33	-.02

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

χ²検定

さらにタイプCとシャイネスの関連性を検討するために、各指標について被調査者の平均点 ± 1SDに上下の2群を選出し、χ²検定を行った。

タイプ1とシャイネスの各指標であるTSS-1, TSS-2, TSS2-1, TSS2-2, WSS1, WSS2, WSS3, WSS4, WSS5についてχ²検定を行った結果(表5～13), χ²値は有意であった。いずれの結果も、タイプ1の得点が高く各シャイネスの指標の得点が高い人と、タイプ1の得点が低く各シャイネスの指標の得点が高い人が多いことから、タイプ1とシャイネスの関連性が示唆された。

タイプ5についても同様にχ²検定を行った結果、タイプ5とTSS-1, TSS-2, TSS2-1, TSS2-2, WSS1, WSS3, WSS5ではχ²値は有意でなかった(表14, 15, 16, 17, 18, 20, 22)。したがってタイプ5とTSS-1, TSS-2, TSS2-1, TSS2-2, WSS1, WSS3, WSS5との関連性は見られなかった。タイプ5とWSS2についてχ²検定を行った結果(表19), χ²値は有意であった。したがってタイプ5が高くWSS2が低い人が多いことから、理知的合理的思考が高い人はリラックスしていることが示唆された。タイプ5とWSS4についてχ²検定を行った結果(表21), χ²値は有意傾向があった。したがってタイプ5が高い人ではWSS4が低い人のほうが多く、タイプ5が低い人ではWSS4が高い人が多い傾向がある。

これらの結果より、タイプ1ではシャイネスに関するすべての指標で有意差が示されており、

タイプ1とシャイネスの高低の関連性が明らかになった。タイプ5では、WSS2(リラックス)で有意差が示されており、理知的合理的な思考をする人は、シャイネスを喚起する場面においてリラックスしているということが示唆された。また、タイプ5が高い人でWSS4(自信のなさ)が低い人のほうが多く、タイプ5が低い人ではWSS4(自信のなさ)が高い人が多い傾向があることが示唆された。

表5 タイプ1とTSS-1の χ^2 検定の結果

	TSS-1高群	TSS-1低群	合計
タイプ1高群	62	16	78
タイプ1低群	11	67	78
合計	73	83	156

$\chi^2(1) = 66.97, p < .001$

表6 タイプ1とTSS-2の χ^2 検定の結果

	TSS-2高群	TSS-2低群	合計
タイプ1高群	52	23	75
タイプ1低群	14	53	67
合計	66	76	142

$\chi^2(1) = 33.38, p < .001$

表7 タイプ1とTSS2-1の χ^2 検定の結果

	TSS-1高群	TSS-1低群	合計
タイプ1高群	42	34	76
タイプ1低群	30	47	77
合計	72	81	153

$\chi^2(1) = 4.08, p < .05$

表8 タイプ1とTSS2-2の χ^2 検定の結果

	TSS-2高群	TSS-2低群	合計
タイプ1高群	59	7	66
タイプ1低群	6	66	72
合計	65	73	138

$\chi^2(1) = 90.81, p < .001$

表9 タイプ1とWSS1の χ^2 検定の結果

	TSS-1高群	TSS-1低群	合計
タイプ1高群	51	30	81
タイプ1低群	26	51	77
合計	77	81	158

$\chi^2(1) = 102.0, p < .001$

表10 タイプ1とWSS2の χ^2 検定の結果

	TSS-2高群	TSS-2低群	合計
タイプ1高群	47	15	62
タイプ1低群	10	65	75
合計	57	80	137

$\chi^2(1) = 54.53, p < .001$

表11 タイプ1とWSS3の χ^2 検定の結果

	WSS3高群	WSS3低群	合計
タイプ1高群	66	19	85
タイプ1低群	13	79	92
合計	79	98	177

$\chi^2(1) = 72.13, p < .001$

表12 タイプ1とWSS4の χ^2 検定の結果

	WSS4高群	WSS4低群	合計
タイプ1高群	76	7	83
タイプ1低群	14	80	94
合計	90	87	177

$\chi^2(1) = 103.68, p < .001$

表13 タイプ1とWSS5の χ^2 検定の結果

	WSS5高群	WSS5低群	合計
タイプ1高群	65	16	81
タイプ1低群	20	74	94
合計	85	90	175

$\chi^2(1) = 60.57, p < .001$

表14 タイプ5とTSS-1の χ^2 検定の結果

	TSS-1高群	TSS-1低群	合計
タイプ5高群	52	60	112
タイプ5低群	26	23	49
合計	78	83	161

$\chi^2(1) = 0.60, n.s.$

表15 タイプ5とTSS-2の χ^2 検定の結果

	TSS-2高群	TSS-2低群	合計
タイプ5高群	40	58	98
タイプ5低群	20	23	43
合計	60	81	141

$\chi^2(1) = 0.40, n.s.$

表17 タイプ5とTSS2-2の χ^2 検定の結果

	TSS2-2高群	TSS2-2低群	合計
タイプ5高群	42	47	89
タイプ5低群	20	26	46
合計	62	73	135

$\chi^2(1) = 0.17, n.s.$

表19 タイプ5とWSS2の χ^2 検定の結果

	WSS2高群	WSS2低群	合計
タイプ5高群	29	83	112
タイプ5低群	23	23	46
合計	52	106	158

$\chi^2(1) = 8.58, p < .01$

表21 タイプ5とWSS4の χ^2 検定の結果

	WSS4高群	WSS4低群	合計
タイプ5高群	51	71	122
タイプ5低群	26	19	45
合計	77	90	167

$\chi^2(1) = 3.38, p < .10$

表16 タイプ5とTSS2-1の χ^2 検定の結果

	TSS2-1高群	TSS2-1低群	合計
タイプ5高群	48	22	70
タイプ5低群	23	63	86
合計	71	85	156

$\chi^2(1) = 0.80, n.s.$

表18 タイプ5とWSS1の χ^2 検定の結果

	WSS1高群	WSS1低群	合計
タイプ5高群	53	53	106
タイプ5低群	21	24	45
合計	74	77	151

$\chi^2(1) = 0.14, n.s.$

表20 タイプ5とWSS3の χ^2 検定の結果

	WSS3高群	WSS3低群	合計
タイプ5高群	56	72	128
タイプ5低群	17	23	40
合計	73	95	168

$\chi^2(1) = 0.02, n.s.$

表22 タイプ5とWSS5の χ^2 検定の結果

	WSS5高群	WSS5低群	合計
タイプ5高群	64	53	117
タイプ5低群	19	20	39
合計	83	73	156

$\chi^2(1) = 0.42, n.s.$

総合考察

タイプ1については本研究の仮説通りにシャイネスとの関連が明らかになった。タイプ1の因子は、タイプC行動パターンの要素である社会的同調性に関連する因子である。高木・頼藤(2001)は、タイプC行動パターンの1つの側面である「他者への配慮」が神経質・保守的という性格特性と関連していることを明らかにしている。このことから、タイプC行動パターンの強い人は対人場面において、他者への配慮を重視して社会的に同調しようとする傾向があると考えられる。また、崔・新井(2000)は、感情表出の抑制を行う人のタイプとして対人不安やシャイネス特性が高い人をあげており、そのような人は他人と同席する場面で他者から軽蔑されるのではないかと懸念が強く、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、どう相手と関わっていけばいいかわからなくなる、あるいは、ありのままの自分の感情を表すことが、相手との関わりにおいて、少しでも葛藤が生じそうに場合は相手に合わせた

り、相手の気分を損なわないように自分の感情を多く制御して表出すると述べている。このように、社会的同調性とシャイネスとの関連から、タイプC行動パターンの強い人は良好な人間関係を築こうとする傾向と、シャイネスが高い人の対人場面において他者からの認知に注目する態度が関連していることが示唆された。

しかし本研究では、感情抑制や合理性に関連するタイプ5との関連はあまり見られなかった。タイプ5に関連する本研究の仮説は、タイプC行動パターンが強い人は対人場面において感情抑制によって良好な人間関係を築こうとするが、それがうまくいかなかった場合に否定的な認知につながるというものであった。この仮説が支持されなかった理由として、感情抑制をする人は人間関係の中でシャイネスを感じにくい、あるいは感情抑制によって人間関係を作るのに失敗することが少ないからであると考えられる。したがって、本研究での仮説は一部支持されるに留まったと言える。

また本研究の仮説では、タイプC行動パターンの強い人は過度に合理的な対処をするために、対人場面において生じた否定的な認知が維持され、シャイネスにつながると想定していたが、タイプC行動パターンの持つ合理性が必ずしも否定的な認知の維持要因として働いているわけではないことが示唆された。最近では、シャイネスの改善には認知行動療法の1つである自己教示訓練が有効であることが明らかになっており、多くの研究が行われているが、池田・鈴木・根建 (2011) ではタイプC行動パターンのタイプ5の傾向が高い者はその傾向が低い者に比べて、自己教示訓練によるシャイネスの低減が大きかったことが明らかにされている。したがって、タイプC行動パターンの特徴である合理性は、シャイネス喚起場面で生じる否定的な認知の変容においては有用であると考えられる。本研究においても χ^2 検定の結果より、合理的合理的な思考をする人は、シャイネスを喚起する場面においてリラックスしているということや、タイプ5が高い人でWSS4 (自信のなさ) が低い人のほうが多く、タイプ5が低い人ではWSS4 (自信のなさ) が高い人が多い傾向があるということが示唆された。これらことから、タイプC行動パターンの特徴である合理性や感情抑制は、シャイネス特性とは直接的な関連は見られなかったが、シャイネスの改善を考える上では否定的な認知を変容させる重要な要因として捉えることができるのではないだろうか。

タイプC行動パターンは表面的には人間関係や社会的な適応が良好であるパーソナリティである。そのような特徴の中核ともいえる社会的同調性と、対人関係の問題であるシャイネスとの関連性は、今後シャイネスやシャイネスの生起メカニズムを理解するために役立つことが期待される。したがって、タイプC行動パターンはシャイネスを理解し改善を試みる上で重要な概念であると考えられる。

引用文献

- 相川 充 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62, 149-155.
- Buss, A.H. (1984). A conception of shyness. In J.Daly, & J.C.McCroskey (Eds.), *Avoiding communication: Shyness, reticence, and communication apprehension*. Beverly Hills, CA: Sage.

- 後藤 学 (2001). シャイネスに関する社会心理学的研究とその展望. 対人社会心理学研究, **1**, 81-92.
- Grossarth-Maticek, R., Eysenck, H.J., & Vetter, H. (1988). Personality type, smoking habit, and their interactions as predictors of cancer and coronary heart disease. In R.Grossarth-Maticek, H.J.Eysenck, & H.Vetter (Eds.), *Personality and individual differences*. Pergamon Press.
- Grossarth-Maticek, R. & Eysenck, H.J. (1990). Personality, stress and disease: Description and validation of a new inventory. *Psychological Reports*, **66**, 355-373.
- 池田真理子・鈴木平・根建金男 (2011). タイプC行動パターンが自己教示訓練に及ぼす影響—シャイネスの変容におけるパーソナリティの影響—. 日本心理学会第75回大会発表論文集, 418.
- Jones, W.H., Cheek, J.M. & Briggs, S.R. (Eds.) (1986). *Shyness: Perspectives on research and treatment*. New York: Plenum Press.
- 岸本陽一 (1999). シャイネスの3要素理論とサブタイプ, 行動科学, **38**, 81-87.
- 熊野宏昭・織井優貴子・鈴嶋よしみ・山内祐一・宗像正徳・吉永 馨・瀬戸正弘・坂野雄二・上里一郎・久保木富房 (1999). Short Interpersonal Reactions Inventory 日本語短縮版作成の試み: タイプCパーソナリティ測定を中心として, 心身医学, **39**, 5, 335-341.
- 熊野宏昭・織井優貴子・山内祐一・瀬戸正弘・上里一郎・坂野雄二・宗像正徳・吉永 馨・佐々木直・久保木富房 (2000). Short Interpersonal Reaction Inventory 日本語短縮版作成の試み (第2報) —33項目版への改訂— 心身医学, **40**, 447-454.
- Lang, P.J. (1971). The application of psychophysiological methods to the study of psychotherapy and behavior modification. In Bergin, A.E. & Garfield, S.L. (Eds.) *Handbook of psychotherapy and behavior change: An empirical analysis*. New York: John Wiley. 75-125.
- 松島るみ (1999). シャイネスに関する研究の動向と今後の課題 応用心理学研究, **16**, 47-53
- 永野純 (2005). がんの危険因子としてのパーソナリティについての研究の動向 癌の臨床, **51**, 27-35.
- 中谷直樹・福士審 (2003). がんの病前性格 現代のエスプリ, 426, 53-62.
- 根建金男・関口由香・太田ゆず (1997). 自己教示訓練が大学生のシャイネスに及ぼす効果の研究—自己教示文の内容の影響と認知変容のプロセスの検討— ストレス科学 **11**, 324-334.
- Russell, D., Cutrona, C. & Jones, W.H. (1986). A trait-situational analysis of shyness. In Jones, W.H., Cheek, J.M. & Briggs, S.R. (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment*. New York: Plenum Press.. 239-249.
- 崔 京姫・新井邦二郎 (2000). 感情表出の抑制と親和動機およびシャイネスの関連について, 筑波大学心理学研究, **22**, 161-166.
- 関口由香・長江信和・伊藤義徳・宮田証・根建金男 (1999). シャイネスの定義と測定法 カウンセリング研究, **32**, 212-226.
- 鈴木裕子・山口創・根建金男 (1997). シャイネス尺度 (Waseda Shyness Scale) の作成とその信頼性・妥当性の検討 カウンセリング研究, **30**, 245-254.
- 高木静香・頼藤和寛 (2001). タイプC性格に関する研究 ヒューマンサイエンス, **4**, 21-26.
- Temoshok, L., & Dreher, H. (1992). *The Type C Connection*. Random House, Inc. 大野裕 (監) 1997 「がん性格」 創元社.